

平成28年度全国及び岡山県学力・学習状況調査 結果と今後の取組について

津山市立東小学校

教育目標(めざす児童生徒像)

豊かな心を持ち、自ら学び、実践力のある子どもを育てる。

- ともに学ぶ子
- 認め合う子
- たくましい子

今年度の指導の重点

- 基礎・基本の徹底と思考力・判断力・表現力の育成を図り、ともに学ぶ喜びと達成感を味わわせる指導に努める。
- 豊かな人間性を育み、互いの人権を大切にし、誰とでも仲良くできる子どもの育成に努める。
- 心と身体のたくましさを持った子どもの育成に努める。

調査結果について(調査結果において明らかになったこと)

【学力状況調査の結果】
〈全国〉

- 国語では、A「知識」に関する問題の正答率、B「活用」に関する問題の正答率ともに、全国平均、県平均よりもかなり高い。
 - 算数のA「知識」、B「活用」正答率は全国平均、県平均よりもかなり高い。
 - 国語Aでは、「話すこと・聞くこと」の観点の正答率がかなり高い。(県+11.6P 全国+12.9P)
 - 国語Bでは、「書くこと」の観点の正答率がかなり高い。(県平均+13.4P 全国平均+13.7P)
 - 算数Aでは、2.1÷0.7の正答率がかなり高く、(本校86.8% 県72.1% 全国68.5%)三角形の底辺に対する高さを選ぶ問題の正答率もかなり高い。(本校92.1% 県76.3% 全国82%)
 - 国語Bでは、グラフを基に分かったことを的確に書く問題で、正答率がかなり高い。(本校68.4% 県43.9% 全国43.4%)
 - 国語Aでは、ローマ字を書く問題の正答率は、県、全国を上回るが、「hyaku」を読む問題の正答率は、県、全国を下回り、課題が残る。
 - 算数Aでは「比」「割合」の問題、算数Bでは「図形」の問題に課題がある。
- 〈県〉
- 国語、数学については基礎問題、活用問題ともに、県平均を上回る。
 - 社会、理科については県平均と同程度である。
 - 国語では、「書く」、数学、社会、理科では「考え方」「思考・表現」の部分に課題がある。
 - 昨年度は理科の「観察・実験の技能」、「自然現象についての知識・理解」の観点において県を下回ったが、今年度は県より高い。

【学習状況調査の結果】

- 学期ごとの漢字力テスト・計算力テストを活用し、漢字・計算等の基礎学力のさらなる定着を図る。
- 問題データベース等の復習プリントを朝学習や宿題、授業中等で活用する際、時間を区切って取り組み早く正確に解く練習をくり返し行う。
- フラッシュ教材の活用や、掲示の工夫等で、ローマ字に触れる機会を多くし、復習に取り組む。
- 社会科と理科では下学年、特に中学年の学習内容の復習をプリントの活用等により、意識的に取り入れる。
- 文章の量や条件を指定して、自分の考えを書いてまとめる活動を様々な教科で取り入れる。
- 問題解決型の授業展開を工夫し、自分の考えを説明したり友達の発言をつなげて説明したりする場づくりを、授業研究を通して、さらなる充実を図る。
- 4教科の学習到達度確認テストを計画的に活用し、特に活用問題は重点的に扱う。
- 自主学習ノートの取組を充実させ、自分で計画して復習や予習に取り組む習慣を作る。
- 中学校区の生徒指導重点「チャイム、掃除、挨拶・返事」に家庭や地域と連携して実践的に取り組む。

成果と課題

- 国語の漢字問題の正答率が高く、朝学習や「漢字オリンピック」等の取組の成果が見られる。
- 算数では、問題データベース等の活用で、様々な基礎的問題にくり返し取り組んだ成果が見られる。
- 授業において話し合う活動や書く活動をしっかり取り入れることにより、自分の考えを説明したり、文章に書いたりすることに抵抗を感じない児童の割合が高くなり、記述式の無回答率が低くなっている。
- 理科では、学習内容によって、日常使わないような知識・用語の定着に課題が見られたが、授業や掲示の工夫等により改善が見られた。
- あてはまらないものを選択する問題の誤答率や、調査時間が十分でなかったと回答する率の高さから考えると、早く正確に問題を解くという点に課題が残る。

課題に対応した改善方法

- 学期ごとの漢字力テスト・計算力テストを活用し、漢字・計算等の基礎学力のさらなる定着を図る。
- 問題データベース等の復習プリントを朝学習や宿題、授業中等で活用する際、時間を区切って取り組み早く正確に解く練習をくり返し行う。
- フラッシュ教材の活用や、掲示の工夫等で、ローマ字に触れる機会を多くし、復習に取り組む。
- 社会科と理科では下学年、特に中学年の学習内容の復習をプリントの活用等により、意識的に取り入れる。
- 文章の量や条件を指定して、自分の考えを書いてまとめる活動を様々な教科で取り入れる。
- 問題解決型の授業展開を工夫し、自分の考えを説明したり友達の発言をつなげて説明したりする場づくりを、授業研究を通して、さらなる充実を図る。
- 4教科の学習到達度確認テストを計画的に活用し、特に活用問題は重点的に扱う。
- 自主学習ノートの取組を充実させ、自分で計画して復習や予習に取り組む習慣を作る。
- 中学校区の生徒指導重点「チャイム、掃除、挨拶・返事」に家庭や地域と連携して実践的に取り組む。

取組の検証方法及び検証時期(2学期末及び年度末)

- 発表や書くことに関するがんばりの児童アンケートを期日を決めて実施する。(学期ごと)
- 宿題調べを毎日行い、学期に2回ずつ評価し、個別指導を中心に取り組む。(学期に2回)
- 学習到達度確認テストの実施日を計画し、確実に実施する。(学期ごと)
- 漢字と計算の定着を確認するテスト(漢字オリンピック、計算オリンピック)を作成し実施する。(学期ごと)
- 運営委員会を中心とした挨拶運動を実施する。(毎月)

各校の具体的な達成目標(数値目標等)

- 1時間以上家庭学習をする児童の割合を100%に近づけ、苦手な教科の勉強も含め復習してくる児童の割合が県平均を上回る。
- 全年、学習到達度確認テストを完全に実施する。
- 漢字の書き取り定着率を80%、計算定着率90%を目指す。
- 自主学習ノートの提出率80%を目指す。
- 調査時間が十分だったと回答する児童、生徒の割合で県平均を上回る。